

## はじめに

「ジェンダーの主流化」というアプローチを国連として初めて明記した「北京行動綱領」が採択されて、27年が経過しました。ジェンダー主流化とは「政策全般にかかわるすべての領域、政策分野にジェンダーの視点を入れていく」ことで、ジェンダー平等を進めていくうえで基本となる考え方です。SDGs（持続可能な開発目標）の理念となり、ジェンダー平等の実現はすべての目標とターゲットの解決に重要な貢献であると記されています。

しかしながら、現在においても日本を含む世界各国でジェンダー平等の達成には多くの課題が山積しています。それらの課題を解決するためには、これまで男女共同参画の推進を担ってきた人々と若者が、多様な視座をもつとともに新たな取組を展開していくことが重要です。「目の前の課題解決に取り組む」のみならず、課題を生み出す仕組みや背景など根本的な問題に挑むビジョン・ハッカー（Vision Hacker）と称され、世界をアップデートさせる若者の存在は、注目に値します。

『NWEC実践研究』第13号では、「多様な世代とともに進めるジェンダー平等」をテーマに、若者を含め多様な世代によるジェンダー平等の推進が求められる背景について論じ、男女共同参画センターや女性団体、大学等による若手育成のための取組、若者による実践事例について報告します。

第1章 上野千鶴子氏は、ここ数年、フェミニズムに吹いている追い風を第四波フェミニズムと位置づけています。その担い手はフェミストをためらわずに名の若い女性たちである点に注目し、彼女たちが企業や社会に変革を起こしていることの意義について鋭く考察しています。

第2章 伊藤公雄氏は、「再帰的近代化」における「個人化」の進行は、若い世代にとって不安やリスクにさらされやすい状況を生み出す一方、固定的なジェンダーの縛りからの解放やジェンダー平等への指向性の強化をもたらす点に着目したうえで、対立軸が多元化した時代状況の中で「境界線」の引き方や越え方が問われているのではないかと問いかけます。

第3章 神谷麻美氏と草野洋美氏は、国際社会における若者のアドボカシー成果を俯瞰したうえで、若者の力と草の根の若者たちの活動例を振り返るとともに、日本の若者によるSRHRのアドボカシー活動の最近の動きを報告し、若者がアドボカシーに取組む意義について考察しています。

第4章 神崎智子氏は、男女共同参画社会の形成にあたっては多様な人々が集まって知恵と力を結集することが重要であり、その取組を継続し発展させるためには、若い世代の参画が欠かせないと述べ、福岡県男女共同参画センター「あすばる」が若い世代への働きかけを目的に実施している事業について紹介しています。

第5章 竹安栄子氏は、女性のための高等教育の歴史の一事例として、京都女子大学の前身である京都女子高等専門学校の設立から今日までの歩みを取り上げ、現代日本の男女別学＝女子大学の教育的・社会的意義について、機会の平等は教育の平等を意味するのか、別学の意義について考察します。

第6章 櫻井彩乃氏は、若者でつくるプロジェクト「#男女共同参画ってなんですか」の発足経緯と活動過程、若者による政策提言活動が第5次男女共同参画基本計画に与えた影響などについて紹介し、ジェンダー平等実現に向けた運動に若者の積極的な参画を得るためのポイントを示しています。

第7章 相藤巨氏は、地方自治体において女性政策が実現されるにあたっての条件を可視化し、「対象」ではあっても「主体」ではなかった女性が地方自治体の政策形成に主体的に参画することの重要性について考察しています。

第Ⅲ部では、NWECの調査研究や事業について報告します。

専門分野、所属、年代が多様な執筆者による議論を通じて、多様な世代の参画によってジェンダー平等を推進するための課題と展望について、45周年を迎えるNWECに求められる役割も見据えつつ、読者の皆様とともに考える機会となれば幸いです。

独立行政法人国立女性教育会館 理事長 萩原なつ子